

研究ノート

## 中国語史料で語る日本女子大学の教育

沈 潔

A Study on the Education Provided at the Japan Women's University as viewed  
from Chinese Historical Documents

SHEN Jie

要約：20世紀前半頃、日本女子大学はアジアにおける女子教育のパイオニアとして、女子教育の理念と手法を確立し、東アジア諸国での影響力を高めていた。成瀬仁蔵の女子教育論が早くも中国語に翻訳され、当時の中国教育界に大きな影響を与えた。成瀬仁蔵の後継者である上代タノもその理念を継承し、中国社会への発信や対話を促進し、日本と中国の女子教育の交流を推し進めた。

小論は、中国語史料である「興日本女子大学教授上代先生談話」の中で語られた上代タノの教育思想や教育活動を取り上げ、日本女子大学と中国との交流史の一断片の解釈を試みる。

キーワード：上代タノ、日本女子大学、中国、女子教育、李勵莊

key words : Tano Jodai, Japan Women's University, China, Women's Education, Li lizhuang

### はじめに

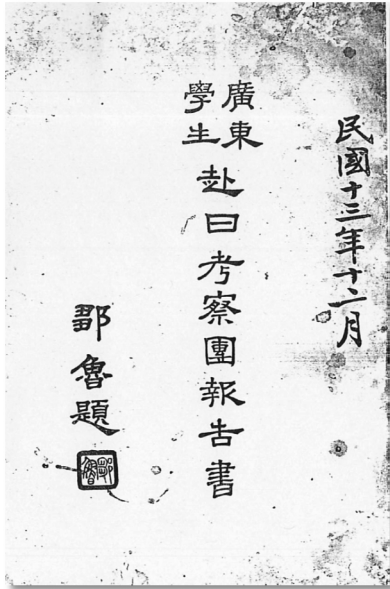
20世紀前半頃、日本女子大学はアジアにおける女子教育のパイオニアとして、女子教育の理念と手法を確立し、東アジア諸国での影響力を高めていた。成瀬仁蔵の女子教育論が早くも中国語に翻訳され、当時の中国教育界に大きな影響を与えた。成瀬仁蔵の後継者である上代タノ（以下、上代と略）もその理念を継承し、中国社会への発信や対話を促進し、日本と中国の女子教育の交流を推し進めた<sup>1</sup>。

小論は主に1924年に刊行された中国語史料である「興日本女子大学教授上代先生談話」の中で語られた上代の教育思想や教育活動を取り上げ、その史実の一断片を解明しようとする。

### 一 『廣東学生赴日考察団報告書』（1924年）

「興日本女子大学教授上代先生談話」<sup>2</sup>（「日本女子大学教授上代タノ先生との対話」）という記録は、中華民国13（1924）年12月に「国立廣東大學（現在の中山大学、1924年孫文より創設）」より編纂、出版された『廣東学生赴日考察団報告書』（以下、『報告書』と略）の中に掲載された文章である。筆者は数年前にハーバード大学の燕京図書館で資料収集した際、この報告書と偶然に遭遇した（日本国内では京都女子大学図書館に所蔵がある）。

報告書は「序」、「日本領事廣東教育庁之往来公文」、「廣東学生赴日考察団之組織」、「興各方面之



談話」,「日本各方面之概況」から構成され,全139ページとなっている。初代の国立広東大学の学長に任命された中華民国初期の政治家・革命家の鄒魯氏(1885-1954)は,表紙の題名を揮毫し,「序文の一」を記した。その「序文」において,鄒魯氏は「白色人種」に続き,「同文同種之中国」を「侵圧」する日本政府の対中政策を批判しながら,明治維新以降の日本は「あらゆる政治・社会生活には実に特徴があり,その日本が極東で突然に勃興できることは偶然ではない。そのため,我が中国の参考に資するものも正に多い」と述べ,政治から社会生活の諸方面まで近代日本を手本にする必要性も強調した<sup>3</sup>。また,鄒魯の序文によれば,今回の「廣東學生赴日考察團」は,「庚子賠款(義和団事件の賠償金)の一部を中国に還流し中国文化事業を興す」計画の一環であり,中日両国の「親善の開始」と言える出来事だったことは分かる<sup>4</sup>。また鄒魯は「学生たちは日本に着いてから色々暖かく招待され,詳しく考察することができた」ことを振り返って,「日本側のご厚意」に「心から感謝したい」気持ちを表した<sup>5</sup>。当時の中国国内の反日的情勢から見れば,これは日本

政府及び民間各界に対する最大限の「謝意」の現れとも言える。

赴日考察団の主なメンバーの顔ぶれは,国立広東大学,光華医学校,(広東)省立女子師範学校,省立工業学校,(広州)市立美術学校など7校から選ばれた「公費学生(給費生)」等15名と,同じ広東省各学校から推薦された「自費学生(私費生)」等11名から構成された。一行は「指導員」柳金田の引率のもとで1924年5月26日に香港を経由して出発し,日本郵船の「横浜丸」に乗って長崎に到着したのは6月1日であった。広東を発ったとき,広東駐在の日本領事館書記官のほか,「湘軍総司令譚延闓,廣東省前省長廖仲凱,大本営参謀長李協和,大本営軍楽隊,廣東教育庁代表,廣東大学代表」など政府と中国国民党の首長たちをはじめ「計共八百人」も見送りに埠頭に集まり<sup>6</sup>,「学生考察団」の「尋常」ではない「意義」を物語っている。

招聘側の日本外務省の狙いはさておき,考察団の主な役割や目的に関して,学生リーダーの謝清は「序文の四」の中に「吾々今度の日本視察の目的は,日本一般人民の態度を観察し,意見を交換し,日本の国民に私達中国一部の学生の意見を分かってもらい,それを以て(日本)当局の目覚めを促す。これは私達最大の使命である」と述べ<sup>7</sup>,日本国民との「交流」即ち「民間外交」を通して日中関係の「改善」にあることを明らかにした。日本女子大学教授上代先生との「対話」は,「民間外交」の「意義」を持つ女子教育に関する「文化交流」活動に位置付けられたと思われる。

## 二・「日本女子大学教授上代タノ先生との談話」の成り立ち

「日本女子大学教授上代タノ先生との談話」という記録は,『報告書』の「與各方面之談話」の項目に入れられた5本の記録の一つであり,執筆者は私立学校である広東女子師範学校の在学生の

李勵莊氏であった。

上代に直接にインタビューした李勵莊は、中国初期女権運動の先駆者として知られている人物である。李氏は、広東女子師範学校卒業で、在学中に広東地域の女学校の学生を呼びかけて、1924年に「廣東女権運動同盟」という組織を創設し、副会長を務めた。「廣東女権運動同盟」の趣旨は、「あらゆる法的・社会的不平等を排除し、女性の幸福のために協力し、女性の権利を発展させること」にあるという<sup>8</sup>。李氏は、広東地域女権運動のリーダーの地位により、赴日考察団のメンバーとして推薦されたと思われる。なお、1920年代前半頃、李氏は中国共産党初期婦人運動のリーダーとして、婦人運動を指導したことが評価されていて、1927年に短い期間でありながら母校の広東女子師範学校学長を務めたこともある<sup>9</sup>。

赴日考察団は長崎、東京、名古屋、京都などを歴訪し、計38日の考察活動を行った。6月5日から20日までの東京滞在中、考察団は外務省が手配した女子高等師範学校（現在の御茶ノ水女子大学）、東京共立女子職業学校（現在の共立女子学園）を見学したが、日本女子大学は訪問対象外であった。しかし、女権運動や女子教育に高い関心を持っていた李氏は、考察団の集団行動の隙間に、日華学会<sup>10</sup>の紹介で日本女子大学の上代を訪ねることができた。

その動機について、李氏は次のように述べている。「近年、私は知的意識に目覚め、女性が社会上・法律上・経済上に受けた格差と不平等な待遇と不自由を根絶していきたいと思っている。しかし、この目的を達成するためには、女性が自ら立ち上がり、奮闘しなければ、絶対に実現できない。そのため、私は近年来、女性の様々な悩みやその解決方法にも注目している。またそのため、今度の日本訪問に教育事情を考察し、日本の女性権利の事情にも注目し始めた。」<sup>11</sup>これは上代との談話の際、「女子教育」と「女性の権利」が二大の

キーワードになった所以である。

一方、上代は1910年に日本女子大学英文学部卒業後、暫く同学部の予科で英語を教える教職を得た。1913年にアメリカウエルズ女子大学より特別奨学金を授与され、同大学英文学科に進学し、1917年に修士学位を取得した。その後、上代は帰国し、日本女子大学英文学部の教授に赴任し、1921年、井上秀が会長を務める日本婦人平和協会の結成にも参画し、役員となる。1923年に井上秀と上代は、来日したジェーン・アダムとの協働によって日本婦人平和協会の婦人国際平和自由連盟に加入する決定が下され、加入手続きが始まる。1924年9月に上代は再びアメリカに戻り、ミシガン大学大学院に入学した<sup>12</sup>。上代はミシガン留学を控えた時期に、中国婦人運動の先駆者であり、女子教育の道を開拓することに携わった李勵莊のインタビューに応じた。

志を同じくする上代との面会は、恐らく李勵莊に予想以上の感触と影響を与えただろうと思われる。李氏は帰国後、上代との質問応答を詳しく記録して『報告書』に投稿し、刊行されることになった。

### 三・「日本女子大学教授上代タノとの談話」の内容

インタビューの中に、李勵莊は上代に対して次の六つの質問を提起し、上代の応答を求めた。具体的な質問応答は以下の通りである<sup>13</sup>。

①女子校が生徒の通信を検閲することについてどう思いますか？生徒たちから反発などはあったのでしょうか？

上代教授：日本の女子校が生徒の手紙を検閲する主旨は良いものであると思う。この20年間、教育現場で女性を観察してきて思うのは、女性は誘惑されやすいということです。そのため、学校の生徒100人のうち、たとえ1人や2人が誘惑されたら、学校全体に影響が出てしまいます。もし

て、女性の教育に大きな障害を与えます！したがって、生徒の高貴な人格を保持し、教育の発展を図るためには、生徒の手紙を検閲する必要があります。これは、通信などを確認したいという学校側の主旨でした。生徒たちの反発があったかどうかについては、反発はありませんでした。というのは、生徒たちの親たちも、自分の子供が誘惑されたら勉学に対する意欲が減退し、学業に支障をきたすのではないかと考えています。そのため、学校側が生徒の通信を検閲したことは、生徒にとって非常に良いことだと判断されました。そのため、学校と保護者は協力して生徒にそのルールの必要性を伝え、生徒たちも学校側の苦衷を了承し、反発しなかった。ただし、これは国によって事情が異なります。例えばアメリカでは、女子生徒が男性に手紙を書くことや男性とお付き合いをしても悪影響がないと思われ、学校は絶対の自由を与えています。

②日本の帝国大学が女性に完全に開放されていないことを、先生はどう思っていますか？

上代教授：日本の帝国大学は女子の傍聴を許しているが、完全に開放していません。これは政府機関としての不善です。政府当局の主旨が恐らく男子社会での仕事は女子の仕事と違うと考えていたので、女子の高等学校（女子中学校）のカリキュラムは男子の中学校のカリキュラムとの間もかなり違っていました。今は一般的教養を持つ人たちはこれに対する批判が多いが、政府の男女別教育方針を変えるのはなかなか難しい。そのため、一般の民衆たちは、女子は歴史上や体格上の関係で、男子と同じカリキュラムでは勉強できない、男女が同様の学業を勉強する必要はないという考えは未だに残っています。これは日本の帝国大学が完全に女性に開放していない理由の一つです。しかし、女性の体が男性よりも柔らかいという事実は、女性の弱点ではなく、むしろ女性のメリットであることを知ってほしい。人間社会で

は、柔らかい女性側が存在することこそ、強い男性側と調和して、世界の平和を実現することができるからです。また、男性と女性の学業は違うが、女性も男性と同じような設備や待遇で学問を探求し、自分の強みを伸ばすべきだということも知っておかなければなりません。本学日本（女子大学）の開設主旨は正にここにあります。したがって、本学の開設する科目は帝国大学で教えられている科目と同じではありませんが、学力上では同等の価値があります。男女ともに同じように学問的に発展してほしいと願いながら、私はよく文化局（文科省の官僚を指す——筆者）に本件を相談しています。

③あなたの国では女性の給料が男性より低いという事実をどう思いますか？

上代教授：日本では、女性の職業は労働力としての面だけでなく、教育の面でも男性と対等ではありません。これは、男女の体力の差があるからとは言えるが、政府はそれらを平等にするよう、努力しなければなりません。しかし今、働いている人たちも教育を担っている人たちもみんな、女より男の方が能力高いとっていて、なお且つ女性が男を補佐し、助け合って働かないといけな思っている。事なかれ主義が主流となっています。そのため、一般の女性は、賃金面での男女の不平等な扱いには反発をしていません。しかし、アメリカ人女性は日本の女性と違って、女性が女性の仕事があるから男性と同じ待遇を求める傾向が現れています。

④あなたの国では、家庭生活における男女の平等が守られていないことについて、どのようにお考えですか？

上代教授：日本の家庭生活における女性の不平等な扱いは、「男尊女卑」つまり男性が女性よりも優れているという歴史的意識に起因している。今では、それを意識した人たちが徐々に男女平等の理念や運動を提唱しています。ただ、個人的な

意見としては、男女平等という目標を達成したいのであれば、必ず教育から始めるべきだと思っています。つまり、男性も女性も同じ教育を受けるべきだということです。男性は外面的に発展させ、女性は内面的に発展させ、これは平等的に求めるべきことです。日本の新しい家庭は、以前ほど女性を蔑ろにしていらないとはいえ、まだまだ少数派です。

#### ⑤あなたの国の女性運動の現状は？

上代教授：今、日本には多くの女性運動団体があります。例えば、政治運動、平和運動、娼婦運動、禁酒運動などが行われています。しかし、各団体はみな大きな勢力を持っていません。女性が政治に参加することは非常に望ましいことだと思いますが、男性のような学力を持っていないので、女性参政がたとえ実現できても有益なことはあまりないと思います。そのため、女性参政で良い結果を出したいのであれば、まず女性の教育を充実させなければならないと思います。女性の政治参加に反対するわけではありませんが、この際、まずは教育に取り組むべきです。その考えで、私は参政運動には参加しませんでした。平和運動に参加しました。娼婦運動、禁酒運動にも参加すべきと思っていますが、時間の制限で今のところ参加していません。でも、女性たちにはいろいろな女性運動に加わって、頑張してほしいと思います。

#### ⑥あなたの国の女性が法の下で平等でないことに対する女性たちの反発は？

上代教授：今、法律を理解している日本の女性が少ないので、法律での不平等な扱いには彼女たちは何らかの反発はありませんでした。今の時代、自覚した人たちは、法律で女性の不平等な扱いに抵抗して排除したいと強く思っていますが、現実的な作業が行える能力ありません。しかし、人間の生活においては男性と同じ責任を持っており、男性と同じ権利を持つべきで、女性を無人格

のように扱うべきではありません。これは日本の法律の欠陥であり、私たち知識人はそれを排除しようとするべきです。

#### 四・日中両国の相違についての李励荘の考察

李励荘と上代タノ教授の対談にどれくらいの時間が費やされたのかは明らかではないが、李氏にとって啓発と示唆の多い会話であったことは明らかであった。李氏は、「上代先生の回答を聞いて、日本の女権（運動）の到達点を知ることができた」と述べ、「日中両国の女性たちの（社会的）地位の相違」について、次のようにまとめた<sup>14</sup>。

#### ①中国と日本の家庭における女性の地位は概ね同じである

日本の女性は結婚していない時は、ほとんどが生き生きとしていて自由で、家庭内では男性とのあいだに不平等な扱いを受けていない。しかし、結婚してから状況が変わり、妻になった女性は、ほとんどが夫の支配下にあります。旦那の好きなもの、彼女の好きにならなければならない。すべては夫の意思に服従し、自由を失ってしまう。それに対して、わが国（中国）の多くの既婚女性の地位は、日本とほとんど変わらない。しかも、中国では未婚女性の場合、父親や兄の支配下に置かれていることもあり、受けた支配は日本の女性より一つ多く、二重となる。現在、中国や日本では、古い慣習や父と夫の抑圧を少しずつ解消しつつある新しい家族組織が現れてきたが、まだまだ少数派であり、一部の知識人の家庭だけ改善されたのである。最後に李励荘は、「この新しい家族組織は是非とも広げてほしい」という結論に到達した<sup>15</sup>。

#### ②中国と日本における女性の社会的地位の違い

日本の女性は労働賃金と政治的権利の面において、男性と同じように扱われてはいなかった。これに対し、中国の女性はこの二つの面においてすでに男性と対等に扱われていた。これが中国人と

日本人女性の社会での地位の相違である。

### ③中国と日本の教育面での男女格差の違い

「日本帝国大学は女性に完全に開放しないことは、あえてお世辞は言わないが、日本はすでに教育の普及に力を入れてきたので、帝国大学で学べる女性も必ず出てくると思う。」<sup>16</sup>たとえ帝国大学に通えないのも日本の女性の問題ではなく、中学校から受けた教育は男性のそれと同様ではないことが原因である。そうでなければ、男性は試験に合格して帝国大学に入れるのに、女性はいれないなんてことはありえない。日本政府はどのような大学を設置する時も、日本の女性が入学できるように開放すべき、これこそが国民の特長を伸ばす主旨の本来の意味である。近年、日本では女性の力を伸ばすために女子大学が設立されているが、自分が調べた結果、帝国大学と女子大学のカリキュラムには違いが多く、帝国大学のカリキュラムを学べる学力を持つ女性がいても、学ぶ機会がないということが分かった。「これは女性の天才にはあまりにも役不足なことではないか？」<sup>17</sup>。ここ数年、北京大学、東南大学、広東大学など中国の大学はすべて男女ともに完全に開放されており、男女を問わず一緒に勉強できるようになっている。これが中国の教育の利点であり、女性の権利を発展させるための基盤である。

### ④中国と日本のフェミニズム運動の現状

ほぼ同じ状態になっている。日本では、政治運動、平和運動、廃娼運動、禁酒運動などに関わる女性の権利擁護団体は数が多いが、女性の権利はあまり発展しておらず、思うような目標に到達していないのが現状である。彼女たちはまだ運動を続けている途中である。中国国内では、女性運動の団体も少なくない。例えば、数年前には北京や上海の至る所に女子参政協会、女権運動会が現れたが、目立った成績は出なかった。昨年、広州にも女権運動会が創設され、中国国民党にも婦女部が作られた。これらはみな女性の固有の人権を取

り戻そうとする試みであり、また中国社会に女性や勤労者に役立つことを実行しようとする事業である。もしみんなが一心同体で努力すれば、達成できないことはないであろう。「もしかしたら、中国の女性の権利は、日本以上に急速に拡大していくかもしれない。女性の皆さん、努力せよ！」<sup>18</sup>

## 五・微妙なタイミングと「不安な心情」下の「赴日考察」

1924年5-6月時点での「広東学生赴日考察団」の日本訪問は、微妙なタイミングと「不安な心情」下の出来事であった。まず、当時の社会情勢から見れば、中国の国内では、1915年1月日本政府が袁世凱に対し「対華二十一カ条の要求」を提出し、中国国内の反日的国民心情を一気に勃発させ、袁世凱が「二十一カ条」を受諾した同年の5月9日は「国恥記念日」と呼ばれることになった。さらに第一世界大戦終了後のパリ講和会議の席で、中国側の山東半島主権回収の宿願が日本へのアメリカの譲歩で敗れ、中国国内で初めての全国的「反日・反帝運動」である「五・四運動」を引き起こした。以降、日中関係はますます険悪の方向に向かえていった。1924年の初頭、広東省の省都広州で中国国民党は「一全大会」を開き、「第一次国共合作」と呼ばれる中国共産党と協力する体制を構築した。「一全大会宣言」に標榜された「帝国主義打倒」など政治的目標の中に、「日本帝国主義」は当然含まれている。このタイミングで日本政府の企画と資金援助で「革命の都」の広州から大学生らを「日本視察」に送り出すことは、北京政権や各界からの「親日的」などの非難を受けかねないほか、どれほどの効果を上げられるのも派遣側の責任者たちにとっても不安の要素であった。視察団の「指導員」を担当した柳金田は、「日本の対支文化事業の趣旨は何か、我々から取り上げた賠償金を以て文化事業を行う真意は果たして真心からのものか」に対して、赴日視察の結

果を見てからはじめて判断できるという保留的態度を示し<sup>19</sup>、学生代表の謝清も「一面から見れば、日本は旧態を変えて誠意で親善したい姿勢に映されるが、注意深く考えると、大いに疑わなければならなくなる！」と強い警戒心を持ちながら出発した学生たちの心情は覗かれる<sup>20</sup>。

このような国家間、民族間の緊張的な雰囲気の中に、李勵莊など一部の学生たちが上代教授など日本の知識人との接触を通して、比較的冷静な視線で近代日本の女子教育の実態を視察し、さらに比較的、客観的姿勢で女子教育を社会発展の目標として捉え、日中双方のそれぞれの長所と短所をまとめることができ、有益な活動の一つともいえよう。日本女子大学と先達の教員たちが近代中国の女子教育にも直接的・間接的につながっている接点の一つとしても記憶すべきであろう。

1894年の日清戦争から1945年の日中戦争の終戦まで、近代日中関係の中に対立と警戒、戦争と侵略の時期が長かったが、両国の関係は比較的穏やかに、密接に付き合う「黄金の十年間」(1898-1912)と呼ばれる一時期もあった<sup>21</sup>。「廣東学生赴日考察団」の日本視察は、いわゆる「黄金の十年間」を過ぎて十数年も経った後の出来事であるにもかかわらず、いかなる時代でも国民同士間の建設的な交流活動は継続することができ、継続すべきことからの一つとして、女子教育に関する近代日中文化交流史上の一ページを飾るべきできごとであると言えよう。

## おわりに

小論の主な趣旨は、中国語史料を通じて、20世紀前半頃に日本女子大学は女子教育のパイオニアとして、女子教育の理念と方法を積極的に中国やアジア地域に発信・対話を求める姿勢を解明しようとした。

かつて本学の名誉教授である久保田文次は、「日本女子大学と中国」という文章の中に次のよ

うな指摘を記している。

「日本女子大学校や成瀬仁蔵の存在は日中両国の女性の交流、中国女性教育の近代化に寄与したと言えるであろう。十年近く前、中国本土と台湾のある世論調査で、日本の大学の知名度を調べたことがあるが、本学は明治大学とともに、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶応大学に次ぐランクにあった。正直に言って、現在、本学が中国を含むアジアにおいて、知名度が高いとは言えない。」本学の「創立の意義、創立者の配慮、かつての交流の意義を考えるならば、本学の研究も、教育ももう少し、アジアのほうに顔をむける必要があると痛感する次第である。」<sup>22</sup>

筆者もその考えと指摘に共感することが多く、久保田文次の言葉を借りて結びにしたい次第である。

## 追記

本研究は科研費「日中間の社会事業政策移転のメカニズムに関する研究」令和2～4年(課題番号19K02224 研究代表者 沈潔)の助成を受けたものである。

## 註

- 1 久保田文次 2005年「日本大学と中国」、『筆のすざび・口のすべり』、日本女子大学文学部史学科研究室発行を参考
- 2 中国語表記では、「與日本女子大学教授上代先生談話」、『廣東学生赴日考察団報告書』、39-43頁。
- 3 鄒魯、「序一」、『報告書』、「序」、1頁。
- 4 同上。
- 5 同上。
- 6 謝清、「遊程日記」、『報告書』、7頁。
- 7 同上。
- 8 「革除一切法律上社会上不平等之待遇、共謀女界之幸福、發展女權」、周興樑、『国民革命與統一建設：20世紀初孫中山及国共人物の奮闘』、天津：天津古

- 籍出版社, 2004 年.
- 9 1945 年 8 月 25 日, 李勵莊は夫の陳公博と一緒に日本に逃亡, 10 月 3 日に中国国民党政府の要求により, 日本政府が彼らを中国に送還, 南京で拘留された経緯もあった.
  - 10 日華学会は, 中国人留学生支援のために組織された半官半民の日本人の団体で, 中華民国から日本に留学した学生のために, 学校の選択, 入学・転学, 宿舍の世話をし, 銀行, 工場等の実習や見学を紹介する. さらにこの団体は教育研究に関する中国人の視察等に便宜を与えることを目的にして, 大正七 (1918) 年に創設され昭和二十 (1945) 年の敗戦まで続いた.
  - 11 李勵莊「與日本女子大学教授上代先生談話」(以下「談話」と略す), 『報告書』, 39 頁.
  - 12 島田法子・中寫邦等編著『上代タノ: 女子高等教育, 平和運動のパイオニア』, ドメス出版 2010 年, 317 頁.
  - 13 ①～⑥の質問応答は, 李勵莊「談話」, 『報告書』 39-41 頁に掲載された中国語の日本語訳である.
  - 14 李勵莊「談話」, 『報告書』, 41-43 頁.
  - 15 同上, 42 頁.
  - 16 同上, 42 頁.
  - 17 同上, 42 頁.
  - 18 同上, 43 頁.
  - 19 柳金田, 「序三」, 『報告書』, 「序文」5 頁.
  - 20 謝清, 「序四」, 『報告書』, 「序文」7 頁.
  - 21 このような表現で 1898-1910 年間の日中関係を最初に総括したのは, アメリカジョージア州立大学歴史学部教授の任達 (Douglas R.Reynolds) の著書『新政革命與日本—中国, 1898-1912 (CHINA, 1898-1912: The Xinzheng Rrvolution and Japan)』(中国・江蘇人民出版社, 2006 年) であった. 彼の論拠と結論について中国の歴史学界では反論が多かったが, 近年ある程度賛同の姿勢に転じた研究者も現れてきた.
  - 22 久保田文次 1998 年「日本女子大学と中国」『成瀬記念館』 No14 12p 久保田文次 2005 年『筆のすさび・口のすべり』日本女子大学文学部史学科研究室
  - 23 『報告書』, 39-40 頁.
  - 24 (1)ー(6)『報告書』, 39-41 頁
  - 25 以下は『報告書』, 41-43 頁

#### 参考資料

- 大浜慶子「成瀬仁蔵著『女子教育』の中国語と近代中国における役割について」『成瀬記念館』成瀬記念館開館 20 周年記念号 2005 年
- 島田法子・中寫邦等編著 2010 年『上代タノ: 女子高等教育, 平和運動のパイオニア』ドメス出版

#### 附録：李勵莊「與日本女子大学教授上代先生談話」の中国語原文（〔 〕内は筆者による訂正及び注釈）

近年以來, 我受著知識的覺悟, 世界潮流的影響, 所以很想把我們女子在社會上, 經濟上, 不平等的待遇, 不自由的苦痛從根本上鏟除. 然而想達到這個目的, 非由我們婦女自己去努力, 去奮鬥, 斷斷不能的. 所以我近年很注意於婦女切身的各種問題, 和解決的方法. 因而我這次跑日本考察教育, 同時也旁及到日本的女權現象了. 可是我這次到日本參觀, 受著團體生活的牽制, 時間短促的影響, 只得和上代先生談談日本的婦女現象罷了. 我現在

把我所發問的問題, 和她的答案寫在下面, 以供讀者君參考罷<sup>23</sup>.

- 1 先生對於貴國女學校檢查學生的往來信件, 有什麼感想? 學生的反動怎樣?
- 2 學生對於貴國的帝國大學不完全開放女禁, 有什麼感想?
- 3 貴國女子的工資低下於男子, 先生對於這點有什麼意見?



4 貴國的家庭間男女不能平等，婦女的反動怎樣？

5 貴國婦女運動的現象怎樣？

6 貴國婦女在法律上的地位不能和男女平等，一般婦女有什麼反動？

我提出上列各種問題，和上代先生作長時間的討論，她也很樂得解答。並且當時有留東同鄉邱琮君代為譯述，所以我記錄得很詳細。現在把他逐一寫出來罷。

(1) 日本女學校檢查學生的信件的意旨是很好的。因為近二十年來，我（上代先生自稱，以下也是一樣）在教育上觀察性女〔女性〕覺得女子確易被人家誘惑。可是學校裏一百個學生當中，若有一二個被人家誘惑，那麼全校都受影響。而女教育〔女子教育〕上也受很大的妨礙！所以要保全學生高尚的人格，和謀教育的發展。就不得不檢查學生書信了。這是學校檢查書信的意思。至於學生方面也沒有反動，因為各個學生的家長也以爲子女一受誘惑則求學心疏，有礙學業。所以認定學校檢查學生書信是很有益於學生的一件了。於是學校和家長聯絡向學生宣佈這種規則的必要，所以學生也能諒解學校的苦衷，沒有什麼反動。要之，這因各國的情形而異。例如美國學校對於女生的書信和男子的交際絕對自由，沒什麼不良的影響。

(2) 日本帝國大學，只許女子旁聽，不肯完全開放，這是政府設施的不善。但當局的意思以爲男子在社會上的工作和女子不同，所以女子在高等校（女子中學）的課程和男子在中學的課程有許多不同了。現在一般覺悟的人，雖然很多非難，但到底不能改變政府對於男女教育的方針。所以一般人的普通心理仍以爲女子因歷史上，體質上的關係，他們所學的課程不能和男子一樣。所以男女沒有同一學業的必要。這是日本帝國大學不完全開放的一個緣因。但我們須要知道女子體魄比男子柔和不是女子的弱點，且是女子的好處。因為人類社會上，有柔和的女性方然後才可以和剛強的男性調劑達世界的和平。我們又要知道男女間的學業雖然不同，而女子的學力應該有和男子同等的設施和待遇。使有

得發展他們的所長。這就是本校（女子大學）設立的意旨。所以本校所授的科學雖然不是和帝大相同，但是學力上就有同等的價值了。我常常和文化局說及這事，希望男女都有同等學力的發展。

(3) 日本女子的職業，不只是勞工方面不能和男子平等，就是教育上所占的地位也是一樣。這雖然是兩性間體力不同的緣故。但政府也應該設法使他們平等。可是現在勞動的人們和教授的人們統統都以爲男子的能力高於女子，且以爲男女時有彼此扶助工作的必要！以調和爲主。所以一般婦女對於男女間工資不平等的待遇，沒有反動。但美國女子和日本女子就不同了，他們女子有女子的工作，所以要求和男子同人待遇的傾向。

(4) 日本女子在家庭間受不平等的待遇是歷史上男尊女卑的緣故。現在一般覺悟的人，亦漸倡男女平等的學說和運動了。但我個人的意見，以爲想達到男女平等的目標，應當先從教育上做功夫。即是男女當受同等的教育。男子在外部發展，女子求內部整齊，這是應該平等的。現在日本的新家庭雖然沒有從前那樣卑視女子，但這新家庭的組織仍是少數。

(5) 現在日本婦女運動團體已經有許多了。例如參政運動，和平運動，廢娼運動，禁酒運動等等是，但是各團體都沒有很大的勢力，我以爲女子參政雖極應該，但女子和男子沒有同等的學力，那麼，縱使女子求得參政也沒有什麼裨益。所以我以爲女子參政想得良善結果，須先從教育上發展。我並不是不贊同女子參政，不過這個時候應先從教育上努力罷了。因為這個緣故，所以我沒有加入參政運動，只加入和平運動。至於廢娼，禁酒各種運動也極應該。我因受著時間的牽制，暫沒有參加。但我很希望各婦女能夠努力從事於各種婦女運動。

(6) 現在日本的婦女當中，能夠瞭解法律的不多，所以她們對於法律上不平等的待遇，沒有什麼反動。現在一般覺悟的人雖然想起而反抗，排除女子在法律上不平等的待遇，可是她們沒有什麼能力去做切實的工夫〔作〕呢。但我們在人類生活上所負

的責任，和所享的權利應該同男子一樣，不當拿沒人格的事待遇我們女子，這是日本法律上不妥當的地方。我們知識界應該努力把它革除了<sup>24</sup>。

\*\*\*\*\*

<sup>25</sup>我聽了上代先生的解答后，就知道日本的女權發展到了什麼地步了。現在把代上〔上代〕先生的答案歸納起來就知道中日兩國女子的地位，有好幾點足以相比較了，現在把他寫在下面：

(1) 中日兩國女子在家庭上的地位，大略相同。日本女子沒有出嫁的時候，多是活潑自由，在家庭間和男子沒有什麼不平等的待遇。可是出嫁之後就不同了。女子既為人妻，大多數受夫婿的支配。夫婿喜歡什麼，她就喜歡什麼，完全以夫婿的意旨為歸，自己的自由權也喪失了。反觀我國大多數已出嫁的女子在家庭上的地位也和日本的大同小異，但我國女子沒嫁時還要受父兄的支配。比較日本更加上一層。現在中日兩國雖有新家庭的組織，逐漸把從前的固有的陋習和父兄夫婦的壓抑革除，但統計起來仍是少數的少數，只有知識界中的一部分能改善罷了，這非力求推廣不可。

(2) 中日兩國女子在社會上的地位不同之點。日本女子在勞工上，政授上〔？意味不明〕的工資，不能和男子受同一待遇，而中國女子在這兩方面已和男子受平等的待遇了。這是中日兩國女子在社會上的地位不同之點。

(3) 中日兩國男女在教育上的差異。日本帝國大學不完全開放，我未敢恭維。因為日本普及教育已很注意，我相信女子中必有人能夠入去帝大肄業的。縱不能有程度入去聽講，也不是日本女子的罪，是女子在中學時期，學校的教授訓育未能和男子相一致的緣故。不然，怎麼男子就及格升入帝大讀書，而女子就不能呢？我以為日本政府不論設立什麼大學都應該公開，使日本女子能夠側身其間，這才是發展國民的特長的真意。日本近年雖有女子學的設立，以啓發女子的特長，但我查得帝大和女大所定的課程有許多不同，如果女子中有可以學習帝大課程的就沒有機會能夠領略了。這豈不是太屈了女子

的天才嗎？至於我國就不同了，這幾年來，我國全國的大學—北京大學，東南大學，廣東大學，統統都完全開放，不論男女都可以跑到入大學裏和男子共同研究了。我覺將〔？得〕這就是我國教育上的好處，和發展女權的基礎。

(4) 中日兩國女權運動的現象，大略相同。日本女權運動的團體—參政運動，和平運動，廢娼運動，禁酒運動—雖是很多，但女權仍沒有十分發達；仍沒有達到他們期待的目的。但他們仍然是繼續運動中。至於我國的婦女運動團體也不少。例如年前北京，上海各地都有女子參政協會，女權運動會的發起，但總是沒有很大的成績，所以去年廣州又有女權運動會的組成，國民黨婦女部的設立。這都是想把我們女子固有的人權攬回來的呵！並想在社會上做些有益女子和勞動平民的事業呵！如果我們大家肯努力奮鬥，那就沒事不可以做成了。或者我們中國的女權還要比日本擴張得多和迅速呵！我們女同胞努力罷！

以上四點就是我個人的見解和希望，也算我這次旅日后的貢獻了。